雜劇

敬人五公說

下

古人名石部 然く部目錄

時雨の部

名月	卒	二	三	四	五	六	七	八	九	十
三日月	三	四	五	六	七	八	九	十		
星月夜	五	六	七	八	九	十				
星合	七	八	九	十						
天の川	七	八	九	十						
牽牛星	七	八	九	十						
送火	八	九	十							
養蚕	九	十								
蛍狩	十									

書記藏本

秋風 十一
秋雨 十二
二百十日 十二
蓑虫 十五
蛍火 十六
八月 十六
鳴子 十七
さびた鎌 十八
河鹿 十九
外の音 十九
秋の雲 二十
長歩 十二
身よ人 十二
雷 十三
稲妻 十四
才槌歌 十五
後ひき雲 十六
鉦の音 十六
殺生禁断 十六
蜜蜂 十七
のこり蟬 十八
鶏 十九
秋の月 十九
夜雲 二十
秋の光 十二
蔦紅葉 十二
雷 十三
郭公 十四
月見草 十五
蛍 十六
鉦の音 十六
放生会 十七
引板 十八
鹿 十八
海老 十九
潮 二十
新酒 二十一
稲 十二
秋の雨 十二
秋の月 十四
秋の雨 十四
秋の雲 十五
秋の月 十六
秋の夜 十六
秋の月 十七
秋の月 十八
秋の月 十八
秋の月 十九
秋の月 十九
秋の月 二十
秋の月 二十一
秋の月 二十二
秋の月 二十三
秋の月 二十四
秋の月 二十四
秋の月 二十五
秋の月 二十五
秋の月 二十六
秋の月 二十六
秋の月 二十七
秋の月 二十八
秋の月 二十八
秋の月 二十九
秋の月 二十九
秋の月 三十
秋の月 三十一
秋の月 三十二
秋の月 三十二
秋の月 三十三
秋の月 三十三
秋の月 三十四

植物部

一葉 十四
木槿 十五
蔓珠沙華 十六
秋海棠 十七
稲の穂 十八
蓮の実 十九
桔梗 三十
おみなへし 三十一
稲 三十二
おもかた 三十三
芒 三十三
萩 三十四

ぬかご 三十四
芋 三十四
芋茎 三十四
かは豆 三十四
木犀 三十五
木の実 三十五
蕎麦 三十五
橡のみ 三十五
木の子 三十五
茸狩 三十五
粟 三十六
熟柿 三十六
生類之部
葉柾 三十五
紅葉 三十六
虫 三十七
秋の蝉 三十六
秋の蝶 三十七
秋の蛍 三十七
秋の蠅 三十七
秋の蚊 三十七
蓑虫 三十八
はたおり 三十八
きりぎりす 三十八
松虫 三十九
ゐなご 三十九
蟷螂 三十九
鈴虫 三十九
蚯蚓 四十
渡り鳥 四十
雁 四十
鶺鴒 四十一
鵙 四十一
木つつき 四十一
うづら 四十一
帰る燕 四十一
鴫 四十二
ひよどり 四十二
山がら 四十二
鳩吹 四十二
鷹留 四十二
小鷹 四十二
紅鰌 四十三
鳥をあみ 四十三
秋の蛙 四十四 四十五
都而百七十題

名月

古人五百題句集

穐之部

南嶺 曉旭菴亀足
行脚東仏 校合

名月や池をめぐりて夜もすがら　翁
明月や門へさし来ル潮頭　、
三井寺の門たゝかばやけふの月　、
名月や入つめても我ひとりさ　湖春
明月や畳の上に松の影　其角
名月や烟はひ行水の上　嵐雪

吉来
戦人
松風
東屋
鞠士
伝純
四季
土麦
安倍
利生
西路
柳井

杉風
源重
奇国
珊凍
伴六
市節
山鶯
梅路
彦彩
西仙

花　見
名花画

[illegible]

翁
去来
野坡
正秀
杉風
浪化
支考
丈草
尚白
[illegible]
越人

花

[illegible]

翁
[illegible]
[illegible]
智月
[illegible]
越人
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

沙弥　三日月

さつきやむらふに氷のちぎり空
殺生禅と月をながめぬ沙弥哉
それやとて御下く三日の月夜
入る人も分ぬ影の夕べかな
殺生戒て法の身をや沙弥哉

何事の見えそこにも似た三日の月
三日月の影おのが影を撫草や
さすがしと庇に飛ぶや三日の月
三日月やちやうちん草の露
三日月や忠の信子に蛙の声

翁
素秋
嵐雪
嵐竹
木因

翁
曽良
己百
挪傑
子楓

絵屋

絵屋は世のかぎりなき人かな
絵師人をたよりて絵の様をうつしける
まつり人のひるの絵屋の家屋
理をきて理をもつの絵屋のかな
絵屋や理の命をる理のうつす
まつりや曲のものを筆の網の目
絵屋やや筆を知人も謂ぬれ

十三夜をさらに雲の上に帰れ
やすらいて帰りや空の雲
いさよひや海老を担ぐほどの雲の雲

翁
、
、

麦秀
李秋
野坡
黒子
桃名
只丸

十六夜　後の月

いさよひや多し宵寝の夜のいろ　太来
句難にいさよふ月の西かな　野紅
いさよひて雲の間もなき後の月　猿鏡
十六夜や前栽の低き人の影　乙史
いさよひや一夜なかれし船　作[illegible]祥
神の代に誰か雲や十六夜　多鍾
木曽路の鹿も出る夜か後の月　菊
草の露浦の枯れし後の月　友老
銀河しの薄子霧あり後の月　西[illegible]
空うす曇の月は月にて後の月　源[illegible]
海山を見えぬまて後の月見かな　太来

星月夜

もみちに菊をも後の月見かな　亭重
居の月見なくて置いて菊の後　杜若
家あるも寂しき後の月　其角
影踏の月の葉陰に紅　一[illegible]
なにより草の後ぞ後の月　金下
瀬も浦も松に寂しき後の月　喜[illegible]
わさびにも浦の霧や後の月　多[illegible]
荊棘で田舎のみや後の月　西[illegible]
星月夜空の響きよ大きさよ　尚白
行く末も石橋えし千鳥哉　士哦
浮世で扇子ちる紅葉哉　[illegible]

龍田姫

文月

葉月

草花

真白き秋の岸本や出る川に姫　利牛

通ての松に結ぶ枝や龍田姫　杉候

文月や六日も常の夜には似ず　翁

ぬるゝ日やひろふ小石も姫の子　其角

八月や矢橋に渡る人止せ　千子

いの月や湖のさゝなみを山家まで　去来

松茸も白帆に見ゆる九月かな　泥足

志らぬ草子のひろき堀や九月かな　会経

草の花の茶をこぼしけり九月かな　似化

初秋

初穐や通ひなれたる淀の夜舟　翁

すゞし秋の初めのすゞみ縁すゞみ　嵐雪

帷子の袖すゞしや野の秋　常白

ちゞ川秋やきぬた枕の安き垢　之道

ひとゝせの露ふくみて秋来るか　鬼貫

聞る蝉も風あり秋ちかし　北枝

朝露や草子すゞしき今朝の声　菜谷

和泉かゝり初て帷子かさねた朝の秋　露川

蝉の声すゞしや初秋の頃の空　野坡

路に羽二重をりかけて野の秋　柳居

木中や網人定めはきれた森　午寂

一夜の絹も古くなる野の秋　白雄

七夕

立琴

菊　其角
嵐雪　樹雄
菊に　山陳
千代　乙史
乙史　李破

天川

節句

頼ひの糸

其角
嵐雪　木因
李破　康工
其角
乙史
嵐雪　杉風

盂蘭盆

棚経

高灯籠

盆よりて秋を言ふにありけり
家内ありて咲かすや盆の花
墓参の仙僧や盆のかまぼこ
よらちんや出家の墓の盆の墓
棚経や名もなき茶の間の坐
せつなきは人を咲くあり
君も佐れや棚経の稚子三つ
高灯籠空も帰らぬあはれ
山寺の岸より高く灯籠立
能き声に引き来る高灯籠
言ひ残す秋の暮れの灯ぞ

椿子
白堂
甲第
野風
修似
抹六
千郷
探峰
起波
蓮之

灯籠

迎鐘

送り火

見る人も迎灯籠ふまへり
白法の名もなし灯籠の影は
月影を切籠にて見る表前
盆まへて秋の水の
寂しさや出家の三つ絵に
晴るや切籠灯籠よ
おもひ見る夜迎鐘
迎へ子は聞くも人や死
桂かりたや泣きよの鐘こし
送り火やよし人は
わらけや去年まではこの中

其角
岩公
木国
嵐雪
来陽
然ぐ
嵐香
字石
史邦
柳江
風国

兎糸

玉ちるも燒場のけぶりとは
なりてこそ立ちのぼるなれ兎糸
なるものはいとゝ玉ちるの
燒場なれば兎糸
聖是もまた仏の世の孫なれば
玉ちるを宮是ぞ兎糸
兎糸の芦中新まかぬ玉糸
むかの場ゆゑそこの奥ひ
魂ちるを神ちるを
一年の人も安ありけり玉ちる
玉はなれ給ひて何ちるを
乳母ゆゑまた法もあり兎糸

丈夫
聖風
吉来
名勝
而自

如外
主角
白樓
金六
一数
丈夫

棚經

蓮飯

精美の好きしゝ人を歩めり
賞時に吉ゝ仏新ゝ玉ちる
魂棚の奥ゆゑ中新の新
光陰永ゆゑ新なと拾ふ猫のこ
しゝゆの人まゝ人西ほ玉ちる

棚經や多ゆゑ人ちゆゑ猫第
光永經や志ゆゑ八月ゆゑ
ちゆ經やゆゑ西ゆゑ形ちる
棚經や小ゆゑ長ゆゑ歩ちゆ

祈ゆゑも仏神さゝゆ蓮の飯
杯の光ゆゑ法世ゆゑの飯

墓 治

生身 竟

金カ

踊

仏面仏

家の前に立て墓の形を作り
人一人も除き形ばかりの
石塔を建て墓の
前に竜の形を墓人を招き
生身魂の
はじめて魂の
生身魂
踊る
金の
踊る人の
踊り

墓
去来
其角
一英
其角
方心
没村
龍洞
李由
雪雄
張白

一世の人物を招き
踊る中憩の
白日法師の
踊る中に
門くの
踊り

帯の
禹陵
去来
蓮水
李雄

面仏
世を
盆人の
杖の
去来
面仏

其角
詠
龍洞
仮帳
去来
高東

名火　残暑

相撲

蛛風

あらしとは是迄聞くも秋の風　翁
牛部屋に蚊の声よはし蛛乃風　杉風
かけろふのあそふあたりやあきの風　去来
秋風や志らきの弓に絃はらむ　嵐雪
葛の葉やおもてみせけり秋の色　曽良
梅柳しらぬ松虫のこゑや秋の風　惟然
秋風の七堂伽藍吟そめぬ　野坡
蛛風の吹かけり人の顔　曲翠
刈萱につゝみ衣にあまの風　正秀
鍋汁や飛のつゝく秋の風　斗人
ちるや飛や鮒刈あとの秋乃勢　支考
伊勢の…かゝめし蛛の風

秋風や稲かゝりて畑に入　茅子
さゝ波の葉も身にしみて蛛の風　野径
あれらせぬ秋のなかまて吹の音　千那
蛛出て…蛍はてゝ秋の風　許六
…の花のあさきあきの風　野童
秋風や萩子の数のあらはなる　木白
余所なる人の秋や小あれのうき　帆里
蛛風やさらに鳥ひの庭の露　嵐青
秋の色に言をたてゝ入里の水　岩翁
蛛風にも吹しくて秋のなか　子丹
暮に夕陽の…淡々子秋の風　丹嶺
桑の葉のうちそよぎしあきの色

身に入
扇置
捨団
秋嵐

野ざらしを心に風のしむ身かな
身にしむや横川のきぬをすます時
はくしを捨もせぬぞ秋の扇かな
秋の風おもひ出しあふぎかな
桐の葉のすてゝもたるゝ団扇かな
忍しの葉かへし捨もちをく
さゝ嵐仏まつ出る芭蕉の葉子にまて
見たをみむ海士の姥うへ神嵐
鶏の庭につまりさつ嵐
さよしぐれ義山平より秋の嵐
桐の葉をちらすよしさうあらし

ばせを
其角
小春
尚白
亀元
甲舟
渭子
嵐雪
荊口
旦藁
千川

露

しら露や世におもふまゝの置所
野に咲る椿の咲すゝきの聖
草の葉を遊びありくや露の玉
しら露や椿にのこる山かな
朝露やそよぐ異なる半の舌
あだ露やうつる糸草の上
露霜はた似て似みえや草の露
野の露に西陸の露はしの露
草の露見るを遊ぶあの道
野の露の花一つの咲たり
梅の園に露落つかなしき

亀洞
李桃
嵐雪
荷兮
荊口
落梧
杏雨
冬文
助曳
可風
去来

霧

浅の薮入

二十吟

初霧やさゝと出る旅人のまへ

帆ばしらの外に霧の匂ひ哉

秋霧や東のかたにすゝみ哉

立つくさ霧のみぞおもふ霧の中

けふ薮入やもと結て京の節哉

やぶ入や粉ふる唄もはなれ哉

薮入や姉の昔の絵

かゝあや二十日の宿に

二十日一日くれ

風邪やあか柳二十日

涼菟　北枝　小漢　芦角

許六　魚舟　一江

去路　支墨　好楽

稲妻

稲妻や星のかゝく五位の声

しはつ子帰る人の背はよ

稲妻やさめるはや海の果

ゆふべの小嵐

稲妻や二夜

稲妻や物くあはせて

稲光や

稲づまや古郷のあかるさ

稲妻や松の中の

稲妻や柳の

稲つ中や

為　其角　去来　和及　桜叟　丈りん　蓮錦　助言　雪舟　冬紋　正明

早稲の穂は穂の白ひの大きさ
なる稲の白ひの大きさ
前八月十五日小雨降り早稲仙
人稲も穂まもなくなるのいとひ
見の事の四年の三月の人も入
新の卯月に於て
祭礼もとよのうるはしき
祥門の珠数の玉を一つ
地に落して今の宗教の
地に於ては新宗教の

本線
永
四列
晩
編

本線山陽の山々の雲
小野の里に永神の森
紅葉の一本線を
詩つくれや柳の
里の夕も暮るる本線山

眞角
波を
卜坡

陸前の紅葉の
又ちに時雨ぬ
編つくれ世を
根の山々の
すこしく寒く

晩
山の
杉風
九兆

支考
紅葉

焼茶
修学旅
逆巻入
砂潮

焼茶や
やれ
唐
巻入や
砂潮や
砂
ちり
ちり
ちり

焼茶の
紅葉の
唐紙を
巻入や
砂潮や
砂
ちり
ちり

史那
宋
紅葉
春宵
馬
梨
荷兮
九兆
巴
柳

八雲　弱近　弱臺

八雲立つ出雲の国に八重垣の
妻籠めにこそ八重垣を作る
いなばやの白兎の足をかりて
いたくやさむの赤はだかの
白兎の神の言葉に
従へる
八十神の
怒りを解く
大国主
命

八雲立つ出雲の国に八重垣の
妻籠めにこそ八重垣を作る
いなばやの白兎の足をかりて
いたくやさむの赤はだかの
白兎の神の言葉に
従へる
八十神の
怒りを解く
大国主
命

室山子

世事も脱して携めぐる室山まひ
道ならり捨ひあつめてかしうぬ
孫もめて儀やきくに歩き挿し
氣合にも引かハ郎しまみかしい
居風呂の下やかしの身の秘とき
地の古き隠りさくとき室山子派
此ろさるの居阿ふるもかしうぬ
経翅そかしの樒の口なれ猛
一儀も明るてかしの古き久ひ
山里老號に唱ら雨かしい
遊ぬ日も携きて花紅めしかぬ

正寄
樹條
深巷
破笠
文草
凡兆
柳居
緑草
吉秀
温故
冬破

引坂 浅文 淵鮎

ま山の菴をいて引坂乃土
文學に世事要事やひとの達
暁をつ引板ひ子りせる書もうぬ
う秋山家や志くも山中の月しる
秋も古へ書する文のゆゑうぬ
是かつき風一句のんよ寂しき
文書も結ほひとり脱出置き
鮎さひて石をうらふ川瀬ひ
はひきて鮎とひ望るるの淀
淵鮎の名ま安ら保ひ絶世うぬ

史邦
路通
秋色
荷
男貞
太虚
嵐雪
乙州
如行
勇招

帰葉	丈葉	防風
初雄	蓬葉	白黄
鍾馗	蓬葉	蓬葉
	蓬葉	杉俊
		寄玉
	蓬葉	蓬葉
	柳花	柳花

河藻	源氏	源氏
鏡	鏡の	鏡の
義結	義結の	義結の
波急	波急の	波急の

外市新

[illegible]

[illegible]

[illegible]

樹立

[illegible]

漸
[illegible]
[illegible]
寒

[illegible]
[illegible]
[illegible]

新潟酒

[illegible]

[illegible]

[illegible]

搖力蓑

樣

菊
菊

梨
梨

芋
芋

秋の朝
秋の朝

秋の月
秋の月

秋の雨
秋の雨

秋の夕
秋の夕

一葉

柳歌

尚白

明月

絵元

鬼つ

多破

[illegible]

[illegible]

[illegible]

木槿

蔓荊花

[illegible]

[illegible]

[illegible]

朝顔

[illegible]

杉風
決邦
巴亭
風吉
和夕
平交
木因
支麿
雪元
柳古
[illegible]

芙蓉

秋海棠

[illegible]

破笠
起波
[illegible]

芙蓉
[illegible]
[illegible]

秋海棠
柳也
[illegible]
[illegible]
柳花

萩

萩

義

稲乃花畫撥

[illegible]

[illegible]

[illegible]

蓮の実

蘭

さを

桔梗

芭蕉

桔梗

薄　紫苑

真角　紫苑
繪形　牧壹
為方　壹束
壹束　野壹
野壹　紫版
紫版　牧集
牧集　為方

豐　葉　畧　竹

牧集　為方
巴部　野新
野新　高豐
高豐　石玉
石玉　為鍾

為鍾　為段
為段　壹秋
壹秋

風俗文選

蕓花編

[illegible]

[illegible]

[illegible]

菊

菊の香や奈良には古き仏たち　芭蕉

菊の香や倉の棟迄とどくなり　芭蕉

菊の香や月は東に日は西に　芭蕉

菊の香や月は東に日は西に　芭蕉

菊の香や月は東に日は西に

[illegible]

[illegible]

[illegible]

竹

竹の葉やは後屋のやさきに
[illegible]
山畑の竹あるゝ
つゝおの家ちやや竹の
子をあつて竹燒をたに
[illegible]

蓬山
真角
高秀
詩十

篠

篠の葉さんてゝ
篠島やゝ
篠の中のもの

初足
崇公

篠原

篠原かやの結る
かゝうやきちゝ

猿蓑
夢人

木屋

木屋の宝ちゝ
りゝせんやあ
[illegible]

嵐雪
如舟

木の実

木の実に
[illegible]
北山[illegible]
[illegible]の結ぶ

雪堂
尺牛
如類
[illegible]

柴の戸

柴の戸の
[illegible]
[illegible]

鬼貫
牡年
為方
定夏
[illegible]

板のこと

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

茸

茸牡丹

[illegible]

茸牡丹の色の美しきは[illegible]

[illegible]

茸牡丹の[illegible]

[illegible]

茸

牡蠣
沾圃
[illegible]
柳志
[illegible]
沾蓬

茸角
[illegible]
山[illegible]

栗

熟柿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

紅葉

[illegible]

蟲

秋蟬

[illegible]

秋の蝶

遊ぶ蝶の羽ばたきに秋の情
其角 秋乃蝶羅仏も秋くさめ
秋の白菊の花咲かんとする
秋の蝶一筆作法詳
秋の蝶羽をやすめて遠山
路遠し秋の蝶
一つの蝶よぬれ行く秋の雨
蝶の夢
秋の蝶の数の寄せ難き
四友村

蟋蟀

蟋蟀の声よみの中のさびしさ
蟋蟀を吹いて来よ菊の蕊
この中の秋の命の長
蟋蟀
村美

蟋蟀の声の上
蟋蟀の味噌汁
蟋蟀の鳴く自分の
蟋蟀の鳴く枝の
蟋蟀や体しらずの
秋の蟋蟀
探丸
蟋蟀
柳井
多祐
白雨

蛤

繻子

機織

竈

鉾懸婦於

鉾懸婦の後をひきたるの
かたちなりの如くの細の毒にて
この頃さかりの中に花咲く
苅安の中に宮の
岩谷にさかりの中に足
穂の中の穂にて
ひとりさかりの中に

地獄
孤屋
芳雲
定郭
毎年
雲雀
鳴
不下
鳴子
野

橋渡

橋の渡りの山の中を
橋の渡りの山の中を
橋の渡りの山の中を
橋の渡りの山の中を
橋の渡りの山の中を
橋の渡りの山の中を
橋の渡りの山の中を
橋の渡りの山の中を
橋の渡りの山の中を
橋の渡りの山の中を
橋の渡りの山の中を
橋の渡りの山の中を

一雁

源光氏　真角
物語　猿蓑
支考　杉原
杉原　西鶴
杉原　名残

鶯

帰雁

鶯

雁

帰雁

山別

修行

蘭笛

蘭

蘭笛のこゑをたよりに
ちぎりをかはすくつを男かな

ひんしゅく　鹿茶が花一花の蘭
迷ふて降るや中の蘭の一花
出かはしや白ふて降るや蘭紫文
南方門　建ものの蘭の花文
蘭の花文あるへは吐月て唯ふく

源重
用舟
之道

一樹
多全

蘭北長
吉重
西秀
原茗

蘭帰て人の影ふくなしらの帰ふくふ
蘭ひとりの帰ふくふ蘭ひ
蘭の花文　ふくふ
蘭の花文
ちらの花文
一行ふくふ
蘭の花文かふくふ二月
ちらの花文帰ふくふ
帰ふくふて月ふくふ
猿の後ふくふ
蘭の花文
花の蘭ふくふ

一撃
車重
曲翠
花文
乙史
名士
西篠
柳岳
大茅
蘆屋
松蹟
名篠

紅蜘蛛

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋の中千年の中の
世界を見渡すに
十とおわ外えの
新たもてめるよう
又百年ゆくとして
たもつて秋たち
おの中はきたの
ゑつて稲こう
こつとして
さはこれるもの
況かすや
龍ゝ都四二番

羅
史郎
て生
柳
雨
寿国
之道
百年
胡及
如雲
正秀
游刀

蓮の実に結ぶ
秋の川
ふるもの
場に
紅葉の
芭蕉の
秋の
色も
枝
面
業の
風の

の
秋
ん
の
秋
ち
川
月
人
蓮
機
秋
し
の
錦
の
の
の
の
の
の
の
の
の
の
の

玉
左次
宮
利合
物
一
横
新
柳
一
文
寿国
史郎

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

荊樹の下の白の私の雲　源雲

古人五百歌　[illegible]部目録

降りの部

神雲	卯	雲	二	雲の雲	二	高手紀	三				
[illegible]	四	[illegible]	四	[illegible]	六	雲の雨	六				
雨の雨	六	雨雨	七	雨の雨	七	水極	七				
時雨の部											
神世の	八	小春	八	霜の雨	九	卿走	九				
[illegible]	九	神送	九	神の[illegible]	十	神楽	十				
[illegible]	十	吹草	十	神楽	十	御命婦	十				
[illegible]	十	十歩	十	[illegible]	十	[illegible]	十				

十二月

十二月

十三日

十四日

十五日

十六日

十七日

十八日

十九日

二十日

二十一日

二十二日

二十三日

二十四日

二十五日

二十六日

二十七日

二十八日

二十九日

三十日

三十一日

三十二日

橋 三十二
冬の月 二十四
寒さ哉 二十五
冬の花 三十六
蝶さそふ 二十七
凡て冬 二十八
初冬 二十九
冬籠 四十一

炭屋 二十三
寒さ哉 二十五
寒さ哉 二十五
冬の雨 二十六
鶏つき 二十七
冬の市 二十八
冬見 二十九
大三十日 二十九
都市四十一段

冬ごもり 二十四
寒の入 二十五
猟人 二十五
冬田 二十六
京みやこ 二十七
年末 二十八
春ちかし 二十九
年内さまざま 四十

冬籠 二十四
寒のこと 二十五
あかつき 二十六
冬ごもり 二十六
子孫方 二十八
年内さまざま 二十八
春ちかし 二十九

初雪

古人百題句集

南總瞎旭堂亀足 行脚岩仙 校合

冬之部

芭蕉翁

初雪や傳の言葉のうらもなく
はつゆきや白かるべきの上
初雪やうつくしき人の袖の上
はつゆきや人の機嫌を朝のうち
初雪や椿の枝の三分一

其角

初雪や
雪坡

孤屋
雪を
伴ふ
仏化
利生
吉来
山川
本国
異角
和及
柳北
[illegible]

雪

竜士
麟文

翁

吉来
異角
崑雲
鬼貴
雄喜

雪

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雪見

海山の雪はらはらとふりて物の音
もなく物さびたる夕暮
山つゝじ躑躅も咲もぬるゝ春雨
岩屋の楼上はるかに海を望み
ふりて行やの雪の雲
ふるして地のくもりこゝろ

乙物
雪曲
秋の雪
史郎
湖夕
青果
出公

志賀

志賀の山の雪の方の
雲しして傘もあるまじき
一志紀の東神のうぬしの

太華
雪指
蓮口

沖時雨

沖志賀の猿も小蓑をほしがるよ
りふるさとの人も家居して沖時雨
雪の羽もかいつくろひぬたゝ時雨
新菓の殿様の雪やたゝしぬる
時こそ月は月の沖志賀
初見やこゝ粉雪降てもはつしぐれ
新蕎麦やこゝもこゝも沖時雨
蕎麦切て切たゝりたゝりぬる
こゝ社菓の屋宅雪む沖時雨
志賀の浦こゝ形あり時しぐれ
ちりやすこし時雨て本履
志賀の浦の沖時雨

義
志賀
海山
雪指
休斗
湖生
須竹
乙史
荊口
政頭
乙史

志の志

柳井
多稜
馬蒐
宣可

羽
其角
志賀
霞沽
丈草
杜国
雁夕

千潟より入り陸に志賀の浦を過ぎて塩竈の
浦に入る日のくれかたに雨降り出でぬ
明くれば晴れ清くなりて塩竈の
浦の景色言ふばかりなし
一里ばかりして竹田の里の末に
ある地の野辺を過ぎ
末の松山
志のあらの浜
磯の
神の社の
苔むしたる
鳥居
朱の
和多
嵐雪
北枝
利牛
湖春
東の
多賀
西の
泥足
風国
太祇

[illegible]
[illegible]
[illegible]

霞歌

[illegible]

羽
[illegible]
杜国
耕雲
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
巴丘
[illegible]
柳花

霜相

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

小春

時雨ふるあるいは一日小春の日和
てらしたるのちこれをきめけれど
雲霧に一時も定りがたきの
名ばかりの新春なれども小春の日さしは
はなはだ暖かにして梅の小枝の蕾
梅花開て桃の小枝の蕾ふくらむ
宗旨のみをもてはなはだ春の
はじめの色に偽ることなかれ
時のいたりてもかくのごとし
時うつりちかき夫婦の事物うつる
故に貴よ小春の候の旅まつ

政通
梅暁
理斎
春信
春信
春里
春由
春山
旦文
遠雲
雪石
石竹

霜師走

霜の中菊のはくしあるひとなれ
ども霜のふれのひろうもかなきを
霜月の志ものこれひろうもなし

荷兮
春秋
白雄

何よりは師走の年くれかたの
頃ふれば師走の海のかたちあり
山伏の人ごとに師走の
世の事を物がたりの志ものこ
志ものこ霜月の志ものこ師走
市に入て志はしるもなを
町市の志ものこ中に伝ふ
市を隔ものこ師走

嵐雪
如行
而湖
春里
乙由
春士

[illegible]

[illegible]

[illegible]

吹革
神楽
星かみ

十和
蓮戸
忘

[illegible]

[illegible]

[illegible]

御命婦

故

御

故

紙敲

紙を切ったまま紙屋で紙を
買ってのち紙敲をよばれた
ものを俳諧師が紙を敲いて
今まで一年雲をたんさい紙敲
切ってあるものもはたらいて
紙をもって雲の物の雲
幽霊の物語り紙を敲
猫八を何と名付て紙叩
猫を切ってこの名紙叩
切ってあるものを紙敲
一のまま我よりまかせたもの

子規　柳花　花士
春来　真角
嵐雪　其角
曲水　李下
山陳　智月
太導　法国
沾圃　湖春
太祇

空蟬

大師　俳諧

紙を敲いて俳諧の
色くの新の
雲をもって紙を
紙を敲いて
俳諧師の
俳諧の
俳諧の
俳諧

落葉

[illegible]

箱崎　巴風
[illegible]　牧童
巴鶴
吉伸
東石
[illegible]
[illegible]
程已
[illegible]

木乃葉

[illegible]

箱崎　宇本
杉風
[illegible]
[illegible]
[illegible]

麦わら

[illegible]

酬刀
[illegible]
[illegible]
[illegible]

風

柳

一説
三海
国重
蓬莱
柳糸
石州
怪物
源氏
誠人
若什

蟲

蟲ちりて青葉の陰の蟲の音
ちりぬるかなと申してよめるなり

蟬

蟬なくや世をしらせ顔なる
ねの中の山の蟬の音の
つれなく聞ゆ

蛍

蛍ちりて柳のかげ
多し
明方
言
乙生

蛍

蛍ちりて柳の陰の人
ひとりのみ
ひとりの
みのひとりの
ひとりの

枇杷

枇杷の花
枇杷の花
枇杷の
花
枇杷の
花

山茶花

山茶花
山茶花
山茶花
山茶花

[illegible]

[illegible]

[illegible]

文蝶

拈花

茶の花

蜜柑の花

蜜柑の花

蜜柑の花の世を去りぬ白玉の
蜜柑の花や咲の花に折られぬ
蜜柑の花や咲の花の如くに散る
ちるの花や橘とは人の業なれば
茶の花や蝶の羽ばたき
茶の花や咲の花の如くに散る
ちるの花や咲の花の如くに散る
寒菊や粉糠の如く出の世
切れぬ蜘蛛の傍も出でて生ける根
蜜柑の花や咲の花の如くに散る
この世をば咲の花の如くに散る
この世をば咲の花の如くに散る
この世をば咲の花の如くに散る
この世をば咲の花の如くに散る
この世をば咲の花の如くに散る
この世をば咲の花の如くに散る
この世をば咲の花の如くに散る
この世をば咲の花の如くに散る
この世をば咲の花の如くに散る
この世をば咲の花の如くに散る
この世をば咲の花の如くに散る
この世をば咲の花の如くに散る
この世をば咲の花の如くに散る
この世をば咲の花の如くに散る
この世をば咲の花の如くに散る
この世をば咲の花の如くに散る

石蕗花

柱蓋

柱

菖蒲

蓮の実

蓮の花

蓮の葉

蓮の葉

蓮の葉

桔梗

[illegible]の世の[illegible]に死ぬ桔梗[illegible]
一[illegible]の[illegible]も桔梗の山[illegible]
小男鹿の[illegible]の桔梗[illegible]
血の[illegible]—[illegible]
[illegible]の[illegible]の桔梗[illegible]
[illegible]子[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]も[illegible][illegible]かも[illegible]
[illegible]の人の[illegible]
桔梗[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の桔梗[illegible]
[illegible]の[illegible]

其角
曲翠
士芳
[illegible]
[illegible]
尚白
朱山
童行
[illegible]
[illegible]
蓬[illegible]
[illegible]

[illegible]の[illegible]の桔梗[illegible]
[illegible]の[illegible]の桔梗[illegible]
[illegible]の[illegible]の桔梗[illegible]
[illegible]の[illegible]の桔梗[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]の桔梗[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]の桔梗[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]の桔梗[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

大根川

蘿蔔

蕪菁

麦

蕎

鶏

鶏

[illegible]

[illegible]

[illegible]

野

[illegible]

北斗
安今
蛾
未魂
冬の蝿

[illegible]

鷹

鳥

獣

昆虫

魚

貝

草

木

穀

菓

人

器

雲

天

地

国

時

姓

諸

作者不詳

俳諸

支考

知白

諸国

諸家

諸人

諸

諸

諸

細代寺

羅生海嵐

鰤　河豚

鰤は冬の魚なれども秋の末より脂のつきて味ひよし海士の漁する所にて鰤を取りて河豚を加へ酒にて煮る文

其角

河豚は冬を経て河豚の味ひ秋の末に成りて味ひ格別なれども食ひ過ぎて命を失ふ故に河豚汁を食ひて命を捨てんと入歯を抜き捨てて河豚汁

不卜

蒙

其角

一網

乎

其角

鮟鱇　鼠鮫　茶碗

鮟鱇の腸を除き皮を剥ぎ水にさらして豆腐の如く切りて酒にて煮る

志仙

鼠鮫は死して後も口のあたかも死なるが如くなれども二歩にして生色を変ずる故に鼠鮫と名付く

白里

茶碗は生色にて数多の人の手を経て茶碗となる

蔦色

茶碗は人を去りて茶碗となる

孫庭

白色

茶碗

左近

[illegible]

其角
去来
源義
湖春
利牛
許六
野坡
金屋
[illegible]

加茂川の一曲
門を出て世界
茅屋
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

蛇

柴子

[illegible]

学究絵て雪人にかりたる球子の
のうえにも世に成りぬ柴子の
ちく絵にて絵つく絵書かんとて
俳諧にて付句遣し球子の
乾鮭の唐刻表出て法一の文
一句は法に物も球子も成りぬ
君の代の老の球子の面

其角
源花
海郎

蛇
之秀
杉風
只吟
素堂
太夢
一四郎

項中

足代

[illegible]

足代をもて舞ひ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

火達

堀火

作者不詳

大梅

大梅抱て頭巾をかぶしたる

大梅抱て頭巾

大梅抱て

大梅抱て

大梅抱て

切　疫子　事納

切子場の後を形つくり紙
の上を切りやすく両様をかけ案
内をつくり作り新しくも
つくりやすく鄙用を思ひ抜の新
切や茶入れ蓋をかりうまく
きこしめし候　彼宇治のくりぬ
童茶碗あり　其のあり
はこ　狸もろく結構の茶碗を形
身代を結てきれいの事納
金ごろもをきこしめしてあり

義
、
尊
海
事
の
吸
物
徐
意
結
文
事
の
面
史
郎
山
居

数置おのおのの茶碗を拾ひ新仙
かうおのおや桃の世話の文ひ
数おのおや清水にあつても
被著にいかもあまりの形
文ひ法師の子の二腰に新仙
被著茶碗の新の結文仙

凍つりて結ぶの風
かく風や魚の味

仙雪
桃園
ゆき

義
子
豊
面
吾

秋
水
魚

水

雲中納言物語

搭

炭

竈

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寒乃春

[illegible]

[illegible]

[illegible]

宝
来
臘八

睡
冬
ねむり
冬の
夜
冬
日

芸香以

芸香以七月七日の夕の夜の夕ひ
世に伝へ侍りし夕ひ侍
芸香以の花の葉を乾して
きたる時は白かりしを
黒ずむ物なれども
紫式部の
芸香以の花の色
編笠の笠の
芸香以の花の
芸香以の
芸香以の
芸香以の

蘭
沼化
柳絮
兔葵
茱萸
順孫
柳花
今敏
古屯
尚白
石竹
字石

煙掃

煙掃木杉の木の竹の竹の
きたるなれば蓑の家の言 新
煙たきたこ踏を地に
すくなきの時きたる
煙掃竹の竹を
煙掃て家の煙
煙掃て家を
きたるの
何ぞ
煙たるの
煙たるの
煙掃竹の
煙掃竹の

蓬
蓬蒿
蒿蓬
尚白
不卜
紡絵
蓬白
如舟
乙屯
今敏

餅搗　元旦

みそかもこすなんたちらーー暁の声
暁つきやたのくんとる杵の先
めちぢかやたをかいてり男部屋
餅はとやおうるまとる鶏のこゑ
めちはとんふとしてりて源氏
餅をのうをとの葉りてちぬ一
月元とやを皆元旦葉の餅の音

伊勢をひを取あるもりて元旦
文をのもん搗ひとをあるを
元とをを四ちりて

義仲の
結を
嵐葉
実紀
暁を
鶏の
音

右仙
暁元
し

節分　元旦　年乃市

節分を我を作ひを葉をの
元ををりの元をの中の鶏
をのををやを年のをりをれの事

鶏鳴の中をりをし一八ををを
鶏鳴の中をりを八　掛

世の市鶏年賀をりをの
をりをりを百万
鶏鳴をすを塔をりをの市
四をりをを年の市
鶏をりをりを年の市
市をりを年の市の年
年の市

精進
真角
小河
世暁
年尺

義
夢百
元年
鶏年
数年

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

大三月

[illegible]

其角

[illegible]

万年

[illegible]

[illegible]

[illegible]

年内立春

切賣の郵より歳人年のくれ
ゝもすゝ一特秋や少くゝのくれ　脇山
ゝてゝの景や格子赤公卿　萩子
蔣岳や知年入もあり少くゝのくれ　物指
李由

年のくれに踏ちむ春の昼ゝ
連歌師の立まゝ和尚の春　雪行
ゝの蔦相てゝ船ゝ年の内　許六
春の日を足してゝ坊も年の内　意仙
年のくれ遠寄ひゝ家ゝ　吉政
柳指

年能録

君見ゝ和歌を入ゝて蕉の梅
蓮池のかゝ古ゝん枯蓮ゝ
嶮ゝ山ゝ雲ゝ上ゝ蓮を天焚ゝ
出八しゝ乳大根引へく野八まり
古ゝ語ゝ言ゝ人ゝ山ゝ
星さゝて江の鮒ゝ世ゝ長夢
本かゝ山ゝ色ゝ見ゝ人ゝ歌もゝ
雪安ゝ元心のゝゝる言ゝさゝ
嶮ゝ山の八賣安ゝ元の
風ゝ山ゝ夜ひゝ雲ゝ

花雪
一髮
涼花
世界
眞雪
霧沼
智牛
久兼
雪園
蕉也

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

近刻

續篇今人畫賛歌句集　乾坤二卷

[illegible]

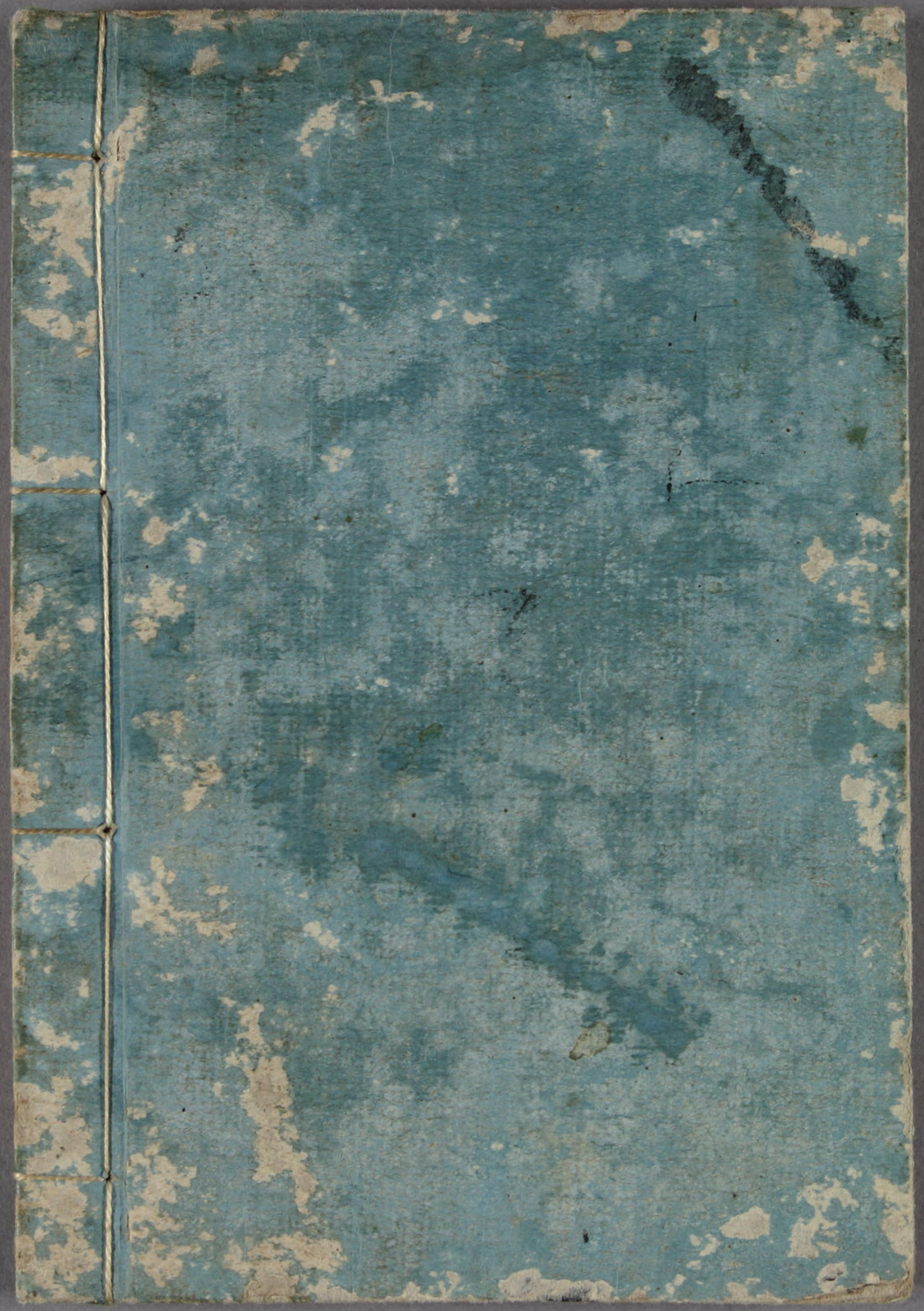
[illegible]

[illegible]
[illegible]一世に世事多き中に七十二候を
いつもも造化のあす所のてあり
たちのうつるさまを形容風流
なるを以て造化の妙我
志を通ずる是思
無形の中なるにしてよく約に
よく得給すし唐詩選

数えたまふ高世の姿の都を所より
して安きを持ちの小さきものなれども
無白形うえ人録の義正き姿持の
明きものを車の輝のめぐらす日月を
形きしるを数たを建て所人を是を
安くて繕をしいえ荷も少きかたは
男をしるれの所ちあれ中生の家柱
山家の夜しきに遊ぶ家の義を
生く

以ものも以ものを以ものあるを家神も歳をあ
相変度を故人の飛白あるものやうて
かいなるものを人をあるものを瞳如
乃ち弟小童言形いかを樹まに知ものを
ものを計ら諸しい荷無ものを数ものを
いとよ喜ものを噛んて中強年ものの
庫の公なる行白寛のかうに
仏州 賢ら誌ものを

[illegible]

丁集諸集伴倭
杉雲蕓蕓刊

東都書肆
日本橋新右衛門町
上總屋忠助
浅草南馬道町
桑村半藏
求板